

優秀賞『分断された世界における「平和の使い」』 倉本 花連

「平和の使い新島襄」。物心ついた時から心の奥に染み込んできた『上毛かるた』の札。私の祖母の実家は群馬県安中市にある新島襄の実家のすぐ近くにあり、『平和の使い』とは何か「新島襄とはどういう人なのか」と考えてきた。その新島襄の目指していた夢が「良心と自由に満たされた社会の実現」「一人ひとりの個性と人格の尊重」であったことを知った時、思い出したのは私が2018年の夏に訪れた香港のことだ。

私は当時、「“近くて遠い隣人” 中国を理解したい」という思いから日本と中国の歴史認識をお互い学び、相互理解を図ることを目的とした香港のサマースクールに参加した。そこで私は中国や香港の高校生と共に教科書にある歴史的記述の違いやメディア報道の偏りについて比較、議論し、今後の平和構築について1週間討論し続けた。そして中国人、香港の友人も多くできた。

しかしその約1年後、香港の平和は突然壊された。香港の民主主義を守るデモに対する中国政府による鎮圧である。香港市民とフリーハグをした街が壊され、民主化デモに参加した学生たちが逮捕される様子をニュースで知り何とも言えない気持ちになった。サマースクールでは言論の自由、表現の自由は確保され、香港の学生も中国の学生もお互いに自由な意見を主張する事ができたが、今はできない。日本では空気のように当たり前と思われている「自由」「人権」は脆いものだ。現在のミャンマーの状況もそうだが一時構築されたと思われた平和はその後、一瞬にして壊される事がある、と痛いほど実感した。

サマースクール最終日、「分断された世界の上に自由と人権が守られた新しい世界をいつも何度でも映し出したい」という希望を込めて『千と千尋の神隠し』のテーマ曲『いつも何度でも』を私がヴァイオリンで演奏した時、参加者全員が合唱し「感動した」と言ってくれた。人と人は国境、文化を超えて「いつも何度でも」つながり合える。これが私の目指したい世界だ。

日本を一步出れば世界には基本的人権さえも蹂躪される国が多くある。そして今の日本の平和もいつ破壊されるかもしれない。「平和の使い」とは国という枠を越え、人権が脅かされている人々を助けることができる人ではないか。私は将来、「平和の使い」となって何度でも分断された世界を繋ぎ直したい。その為にまず大学で国際政治学、特に中国政治について学び、世界中にいる同じ志を持つ仲間と切磋琢磨し、協力し合いたい。

「『知識があり覚悟を決めたからといって小人数では世界を変えられない』などと思ってはいけない。実際に世界を変えてきたのはそんな人たちなのだ」。文化人類学者マーガレット・ミードの言葉だ。同じ志を持った仲間と共に進めば世界を変えることができる。私もそう信じている。